「素晴らしい賞を今後の励みにしたい」とアトリエで語る小林さん

釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔 □1□

財団法人・釧新教育芸術基金による平成八年度（第二十五回）釧新郷土芸術賞受賞者が決まった。発足して二十五周年の今年は、特別賞に画家の小林一雄氏が選ばれた。また音楽ではバイオリンの札木朗里氏、彫刻（木彫）の渡辺一夫氏、箏曲の橋本はるみ氏が受賞した。四氏の業績などを紹介する。

小林さんの画業はもう五十年と長い。高齢のために今、歩行がままならず耳も遠くなったが、磯子夫人が感心するほどの元気ぶりで、衰えぬ作家魂を象徴するように、長い白髪が輝く。今年の白日会展には百号の摩周湖を発表したが、来春の同展出品作の構想を語る小林さんの声はアトリエ内で楽しそうにはずむ。

特別賞 絵画

小林一雄さん（八二）
（白日会委員、釧路市鶴ケ岱三の六）

画業50年、衰えぬ作家魂

郷土風景に生活感追求

「炭砿の画家」日展に10回入選

「どうしても雪をかぶった斜里岳を百号で描きたい。それで子供の車に乗せてもらい、清里町からの山を描いてきたばかり。「父さん寒いから車の中で描いては」の勧めを断固振り切って、寒風の現場に立ちつくした。その八号の油絵作品が画架に置かれている。作家の心境を映したような神ごうしい一枚。「この郷土を愛しているから、その現場にも自分の足で立ち、風景の中に人びとの生活感を感じ、表現しなければ」と小林さんは画家としての信条を語る。

大正三年、釧路市米町生まれの小林さんは昭和十六年に太平洋炭砿入りし、資材関係を歩んで昭和四十四年に定年退職し、間髪を入れず単身で渡仏した。画業の方は太平洋勤務時代から中央の白日会に出品し続け、同会会員や日展審査員などをつとめ、今年の文化勲章を受章した画家・伊藤清永氏に認められた。「それがご縁で上京の際は伊藤先生の所に泊まるようになり、私が先生宅のお手伝いさんをお世話したこともある」と小林さんは当時を回想する。

日展には十回入選という記録を持ち、その初入選作は静物だったが炭砿の選炭場風景もテーマに取り上げ「炭砿の画家」と言われた。小林さんは往事を語り「パリに立つ前は太平洋炭砿の皆さんが、盛大な壮行会を催して励ましてくれた」と今も胸を熱くする。二年間のパリ生活は増田誠さん（故人）の誘いもあってだったが、この間娘さん四人を託された形の磯子夫人の日々も、楽ではなかったようだ。「味噌などの他、甘党なのでアズキや白玉などを釧路から送ったものです」と懐かしむ。

フランスから帰国後才能開花

帰国後は日展や白日会、個展などでその才能を花咲かせる。「作品を通じ人との輪が生まれる。絵は九州でも大阪でも京都の人にも買ってもらえる。そこからつき合いが生まれる。絵を描いてきて良かったなあと思います」と老境の感慨をにじませ「自分の信念で何でも描いてきたが、見た物そのままでなく自分を通し、生活感などをさらに突っ込んで追求してきた」と言う。近年は愛する郷土風景をテーマにした作品が多い。その小林さんの姿から年齢を超越した静かな闘志が迫ってくる。